大人の部活 地元の仲間 #4

〝大人リア充〟を満喫するサークルを連載で紹介します

初心者など誰でも参加できる体験稽古での一枚。毎年秋に開催する本公演のほか、サブ公演や即興芝居も不定期で実施。稽古は週末に2〜3時間、短時間集中型がムナポケ流だ。

演劇プロジェクト集団

ムナポケ（MUNA-POCKET COFFEE HOUSE）

ムナポケットコーヒーハウス

演劇で発見、新しい仲間と「知らなかった自分」

舞台は非日常的な自己表現の場。未経験者には敷居が高く感じる演劇の世界だが、〈ムナポケ〉は初心者にもいきなり気軽に役を振り当てる。ドキドキしながら舞台に立ち、演じる楽しさや、ゼロからチームで作り上げる充実感を体感した人たちは、自然と次の作品にも参加したくなる。

浜松西高校演劇部のOBで同級生の加藤和大さんと永井宏明さんが、社会人として働きながら「仕事だけじゃ面白くない」と23歳でムナポケを結成。コアメンバーは会社員をはじめ、主婦や学生など20〜30人。代表の二人も「人数は把握していない（笑）」くらい緩やかに仲間がつながりながら、もうすぐ結成20年。年齢層は幅広く、メンバー同士で結婚したカップルもいれば、その子どもが作品に出演したりもする。

「ムナポケがあったから、社会人になってからも毎日が充実していた」と加藤さん。誰でも一緒に演劇に取り組めば、すぐに仲良くなれると話す。実際に、今年1月に行われた体験稽古も参加者の半数が初対面だったが、程なく、ほらこの表情！（写真上）こうして、演じる楽しさに触れた人が、いつの間にかムナポケメンバーになっているのだ。

「高校時代の夢はバンドマン」の加藤さん（写真左）と、「高校演劇部では落ちこぼれだった」永井さん（右）の二人が主宰。

次回公演情報／『パンドラの鐘』5月25日（土）、6月2日（日）　浜北文化センター 小ホールにて

夕飯前の、腹ごしらえ。

注文すると、ひと口サイズに切って皿に盛ってくれる。

浜松市未登録文化財

「知る人ぞ知る」名所や旧跡、文化遺産、人、もの、風景など、後世に伝えたい「浜松の隠れ自慢」を紹介します。読者からの推薦募集中!

浜松市未登録文化財 認定基準

右記の条文の内容を満たす人・もの・ことを浜松市未登録文化財として勝手に認定する

一、市民に古くから愛され続けていること
二、後世に伝え残したいこと
三、浜松らしいこと

「おばちゃん、みんな大盛りで！」

料理の注文は自分で紙に書いて、カウンター越しにおばちゃんに渡すスタイル。遠州焼きは大盛りで頼んでも500円。ふわふわとした生地にソースがたっぷり塗られる。紅しょうがと、歯ごたえの残る刻みたくあんがアクセントだ。

「まだコンビニがない頃は、学校帰りの腹ペコ男子の自転車が店の前にいっぱい並んだもんだった」と話すのは、店主の石津谷勢津子さん。文化祭や体育祭の後はクラス全員でやって来て、店の2階まで開放したというエピソードも教えてくれた。

お店ができる数年前まで、すぐ近くに奥山線の名残駅があって、この辺りは商店街だったという。石津谷さんの父親がやっていた履物屋の隣に、練炭一つでお好み焼き屋をオープン。当時はお好み焼きも焼きそばも80円、かき氷は30円だった。

今では娘の山口知子さんが主に店番をしている。「30年前、高校生の頃に通ったんだよ」と言いながら家族を連れてやってくる人が多いそうだ。「そういうの、本当にうれしい」と石津谷さんは目を細めた。

ぬのはしの遠州焼き

たくあん入りのお好み焼きに「遠州焼き」と名前が付いたのはつい10年くらい前のこと。昔からおやつとして各家庭で作られていたご当地グルメだ。かき氷は1年を通して人気のデザート。

お店の看板親子、石津谷勢津子さん（右）と娘の山口知子さん（左）。
ぬのはし〈中区布橋〉営業時間10:30〜18:00／水曜休